

区 潔萍（オー ケッペイ）

中国出身

筑波大学 人間総合科学研究科障害科学専攻 博士課程

1. 「頑固な自分」と「適当な自分」

自分がとても尊敬している先生が、口癖のようによく言ったのは「適当に頑張って！」という一言です。私は、「こんなに適当で本当にいいの？」と、時々不思議に思いました。決して自慢話ではありませんが、自分はよく周りの人々に「真面目」とか「努力家だ」と言われることがあるので、自分にはかなり一筋で頑固な部分があるかと承知しております。こんな自分だから、博士課程の3年間、研究のことばかりやり続けて、それ以外はあまり成長していないのではないかと反省しています。

そして、こんな性格だからこそ、挫折したことでもたくさんありました。日本に来て大学院生の身となり、大学という場所は、ある意味で職場でもあります。学業と言っても実は職業の一環で、先輩後輩との付き合いったり、先生方との関係性だったり、周りの人との人間関係を、もっと柔軟に対応しておかないといけないことに気づきました。他人の価値観を尊重し、個性の多様性を認めることが重要です。でも、自分が本当に信じ価値があると思うことは譲れないことで、自分で守り抜くべきだと思います。私は、坂口国際育英奨学財団の面接を受けさせていただいた時にも言った記憶があります。「子どもたちを相手にする研究だから、早く自分の研究成果は広げるより、本当に効果があるかどうかを検証してから広げたいと思います。」今も、この気持ちに変わりはありません。

それ以外のものは、適当に対応すればいいかと思うときもあります。全ての物事に対して全力を尽くす必要はないし、そんなエネルギーも

ありません。ただ、何もかも他人や環境に流されて、自分の方向を失うのは不本意ですから、そのバランスをうまく保っていくのが今後の修行であり、人生の楽しみかもしれません。

2. 「できたこと」

2021年になってもうすぐ2ヶ月も経ちます。今の自分なら、2020年を振り返ることができます。過去の1年間には、落ち込んだり、また立ち直ったり、跪いてもなんとか走ってきました。こんな波乱万丈な一年が、今後の人生にとっても重大な意義のある時間だと思います。

2020年度は、私が筑波大学の博士後期課程に在学する3年目であり、6月に博士論文の中間発表を終えて、11月には最終発表を済ませ、3月に修了する予定でした。中間発表までは予定通りに進んできたのですが、国際学術誌に投稿した論文は何回もリジェクトされ、結局11月の発表会を申請する用件をクリアできず、最終発表を延期することを余儀なくされました。しばらくの間、色々な思いが重なっていくうちに、知らず知らずの間に自信を失ってしまったこともあります。

「何回か失敗したことくらい、そんなに大したことじゃない」と、今になったらそんなふうに自分に言えますが、当時はそんな余裕もありませんでした。友達や指導教員と相談して、なんとか気持ちの整理をして、次の機会にチャレンジしようと決意しました。その時に、失敗して、格好悪い自分であってもそれを許せる人になりたいと思いました。それに、怪我の功名というのか、最後に博士論文を提出したときは、

かなり完成度の高い論文が仕上げてきて、そして無事に2月の最終発表会（博士論文予備審査会）で合格しました。本当に諦めずに頑張った自分を褒めてあげたいし、支えてくれた人たちにも感謝しています。あとは博士論文の本審査会という大きな山があるけれど、悔いが残らないように全力で準備していきたいと思います。

3.「人との出会い」と「将来計画」

もし、坂口国際育英奨学財団の皆様と出会っていなくて、ご援助を受けられなかつたら、過去の1年間、自分はどうなつたでしょう？心の余裕がなくなつて、落ち着いて博士論文の執筆に集中できていないはずです。特に、発表が延期することになった時、家族に対する申し訳ない気持ちがあまりにも重くて、色々なストレスに圧倒されてしまったかもしれません。そして、お金のためにせつせとバイトに励むあまりにエネルギーを使い果たしてしまうかもしれません。でも、今はこんな風に振り返えられるのは、坂口国際育英奨学財団の皆様のお陰で、それが現実とならずに済んだからです。

最近、1人の中国人留学生が研究生として同じの研究室に入りました。私はその留学生のチューターになったので、彼に付き添つて色々な手続きをしていました。（自分も今でもそうですが）日本語でのやりとりにまだ不自由な彼は、どんな印象を受けて、どのように日本を認識しているでしょう。彼がつくばに来た初日、各種の手続きで大学や市役所に行ったとき、対応してくれた職員の皆さんには本当に彼に対して優しく接してくれました。彼は聞き取りがとても上手な子ですが、喋るときには少しストレートな言い方になります。実は、彼は本当にとても礼儀正しい子で、思いやりもありますが、未熟な言葉を操るとどうしても誤解を招きやすいです。それにしても、皆さんはにこやかな笑顔で向き合ってくれました。その場面を見

ているうちに、自分が当時日本にきたばかりの時のことを思い出しました。「なるほど！自分もこんな感じだったのかなあ。」と、私も当時は、皆さんの優しさに気づく余裕がなかったのですが、本人にもいつかは伝わるはずです。

私は、4月からいまの研究室で非常勤研究員として働き、しばらく日本に居続けることになりました。これから1年間は、研究員として研究活動を続けながら、海外のアカデミック世界でポストを探す予定です。どの場所にいても、有意義な研究を続けて、特別な教育的ニーズのある子どもたち、保護者の方、そして教育現場の先生たちの力になりたいと思っています。それは、自分がこの6年間、日本で教育を受けて、色々な方から応援をいただいたことへの、一番の恩返しになるのではないかと思います。坂口国際育英奨学財団の皆様、過去の1年間、お世話になりました！いつも私たち奨学生のことを優しく見守つてくださって、本当に、ありがとうございました！良かったら、今後とも、どうぞよろしくお願ひいたします！

2021年2月